フランス語定冠詞の一用法、特定的文脈における一般性の指示

林　　迪　義

L'emploi générique de l'article défini en français dans des contextes particularisants

HAYASHI, Michiyoshi

Sommaire

Les noms comptables au singulier avec l'article défini peuvent référer à l'espèce dans des énoncés comme "Je suis allé manger au restaurant hier soir" ou "Mon ami a pris le train pour venir ici". Le restaurant où l'on s'est rendu et le train qu'on a pris, tels qu'ils existaient, sont des référents uniques mais non identifiables pour l'alocutaire à qui on ne les avait pas mentionnés. Alors pourquoi ces noms ne portent-ils pas l'article indéfini ? Nous dirons qu'ils désignent les généralités ou les espèces qu'on appelle respectivement *restaurant* et *train*. Le premier énoncé entend qu'on est allé manger en ville au lieu de dîner chez soi, le second qu'on a choisi un moyen de transport en commun et non la voiture par exemple. Cet usage générique des noms comptables peut paraître incoherent lorsqu'un nom singulier s'emploie dans une situation où l'on a affaire à plusieurs unités appelées par ce nom : "Ouvrez la porte" se dit même quand il y a plusieurs portes en face et qu'on voulait que celle de sortie soit ouverte. En fait, il est superflu de préciser laquelle si l'alocutaire se rend compte que l'autre s'apprête à sortir. La porte, c'est ce qui permet de passer au-delà. Il convient donc d'évoquer à l'alocutaire la notion de ce qui est. L'article défini sert à marquer les espèces comme notoires (à tous les locuteurs

parlant la langue française).

0. はじめに

単数名詞句が定冠詞を伴って一般性を指示するような文のタイプとして、まず分析文が考えられる。

(1) a. L'homme n'est qu'un roseau pensant.
b. Le tigre en mourant laisse sa peau.

分析文は主語名詞が指示するものについてその属性を述べるものであって、そのものは特定の存在ではなく、一般性が考慮される[1]。分析文とは違って特定の事行を述べる文ではそれにかかわる人、個物、場所などは唯一存在である。だが、それらのものに語彙項目として対応する名詞句は定冠詞が付加されていても特定的指示をもつとは限らない。例えば、

(2) Avant de rentrer, je suis passé à la boulangerie.

での la boulangerie は「私」が立ち寄ったという事行の認識においては唯一の対象に当たる。しかし、この文においてそれが個別的に同定されるものとなっているとは断定できない。つまり共話者に当該のパン屋が知られている前提があるということが確かでないのである。これは定冠詞が用いられるための既知性の条件であるが、次の例でそれを思い起こしてみよう。

(3) a. Paul a trouvé un petit chat sous un porche. Le chat était affaibli.
b. Que veut dire le mot *iki* ?
c. Passe-moi la gomme.

(3-a) で était affaibli と言われている chat は先行文に導入された個別的表象に一致を見る。(3-b) での mot は後続の iki という語によって特定されるわけで、そのものが談話領域に存在することが共話者に知られている。(3-c) では相手が同じ消しゴムを手にしていたというような発話場面から与えられる情報が想定される。(2)において boulangerie に当たる個別のパン屋が同定されるための情報は文脈に与えられていない。特定のパン屋であるなら共話者はそうした情報を話者と共有していることになるが、それは確かめようがないわけである。この談話の条件で(2)が共話者に了解される発話であるなら、la boulangerie はパン屋一般を指示しているはずである。なぜなら話者はいかなる場所に立ち寄ったかを言おうとしている

と解釈されるからである。そしてそれによって「私」がなにをしたが一般的に理解されるからである。à la boulangerie は次のようなパラダイムのなかで種別的単位となっているはずである。

(4) Avant de rentrer, je suis passé à la charcuterie/à la pharmacie/à la papeterie, etc.

このように認識の枠組みにおいては特定時点の事行が対象となっていても、事行にかかわる実体が定冠詞付きの名詞句によって一般的な種として表されることがある。以下に動詞の補語位置で一般性を指示する個体名詞に対して定冠詞が果たす役割を明らかにしたい。

1．共通の知識領域

ある人または個物が特定の地点にいる（ある）ことを伝えるために［être à le N］という構文が用いられる。Borillo（2001）によればこの構文は定位表現の典型であって、Le N は共話者がすでに知っている場所の表象を呼び起こすことが前提となる。

(5) a．Paul est à la cave.
　　b．Paul est au jardin.

この２例は発話時に話者がいる場所の周りの様子を知っている共話者にしか有効ではない。その共話者には cave, jardin というだけで、該当する物が思い起こされわけである。前提となる共通の知識領域がきわめて限られている。これに対して

(6) a．Paul est à la mairie.
　　b．Paul est à la gare.

では共通領域がかなり広い。また mairie や gare が表す概念は都市に付随する施設という特性を含み、施設の機能からポールが行なっていることが示唆される。mairie, gare と共に restaurant, café, cinéma, théâtre, banque などの名詞は一般に周知の実体(entité)を呼び起こす。それぞれが「種」を表すと言えよう。それは(7)に見るとおりである。

(7) Paul n'est jamais chez lui. Chaque jour, il mange au restaurant et il passe ses soirées soit au café soit au cinéma, quand ce n'est pas au théâtre. (Borillo, ibid.)

ここに列挙されている場所はポールが習慣的に出入りするところで、一般

化されている。反対にある時に行ったということから唯一の場所として認識される対象であっても、それを一般的に指示することもできる。(8)は(2)と同じ文脈のタイプに属す。

(8) Venu à Paris pour le Salon de l'Automne, le père Mathieu a amené son fils au restaurant. (Nègre, H. *Dictionnaire des histoires drôles*, 2036)

唯一の生起の場である個体(表象)は、その本質的な特性によって一般的な種に同定されるわけである。

以上の考察から我々は定冠詞の一般的周知性の用法について一つの仮説を立てることできると考える。

(9) [仮説] 語彙項目としての名詞が表す種が周知のものとして解釈される文脈で定冠詞はその解釈を助ける。定冠詞は共話者一般の知識領域に存在している当該の種を呼び起こすはたらきをもつ。

共話者の一般的知識の領域に保存されている「種」は単語の表す概念と重なるが、同じではない。「種」は定冠詞によって明確な内包が想起される。例えば la maison は個人の住居の観念がそれに対応するが、une maison にはその外延における多少とも特殊な個別を想起させる。例えば休暇の話をしながら人は hôtel を宿泊施設として周知のものと考えるが、maison は不特定の個別存在として提示する[2]。

(9) Où irez-vous pendant les vacances? A l'hôtel ou dans une petite maison?

Borillo (2001) によれば [être à Le N] の構文は特定の名詞については当人がいる場所を定めるよりもそこでなすべき活動やあるべき状態を含意する。

(10) être à l'école = faire des études ; être au bureau = être au travail ; être au cimetière = être enterré

同じことは製造物の名詞にも見られる。

(11) être au lit = se coucher ; être à la fenêtre = regarder dehors ; être au téléphone = être en conversation avec ; être au volant = conduire une voiture ; être au clou = être suspendu

à Le N につながる動詞は être だけでなく、場所や状態への帰着を意味する動詞も含まれる。

(12) mettre son manteau au clou ; aller au lit ; se mettre au volant

名詞がそれぞれの物の本質的特性である機能を想起させる。それが動詞によって引き出されるのである。mettre au clou は suspendre に、aller au lit は se coucher にほぼ等価である。restaurant, boulangerie, hôpital などの名詞も一般的周知性が前提となって定冠詞と共に用いられるとき施設の種類、それぞれの機能が意味される。一般的周知性は特殊領域よりも優先的である。この類の名詞が à Le N の形で一般性を表すことは動詞のタイプにかかわらず認められる。例えば au restaurant は文頭に置くことができる。

(13) Au restaurant, un client appelle le maître d'hôtel et il lui dit : "C'est dégeulasse ! Il y a de la ficelle dans mon potage !" (Nègre, H. ibid.)

また、à l'hôpital は être à l'hôpital で入院している状態を表すことができる。à Le N の形で施設の特性が想起されることは、ほぼ言語内的規則に近い。このことは Furukawa (1997) に引かれた mort à l'hôpital の例についても同じである。

(14) Ma mère est morte à quatre-vingt-quatre ans. J'étais encore colonel, je commandais en ce moment-là une brigade de parachutistes à Pau. Ma mère est morte à l'hôpital, d'un cancer.

ここでは語り手の母が死んだことは先に伝えられていて、当該の文では母がどこでいかなる原因で死んだかが述べられている。à l'hôpital は d'un cancer と意味論的に相補関係にある。この文は「ガンで入院中に亡くなった」と解される。

2．一般性の表現と個別性の認識

à Le N のグループが動詞と緊密なつながりをもちうるのと同じように直接補語の名詞句が動詞と一体的に解釈されるタイプがある。発話場面に同じ名詞で呼ばれる物が複数ありながら単数形が用いられるタイプである。(15)はこのことが問題となって Birner & Ward (1994) などで取り上げられた例の１つである。

(15) Qu'est-ce qu'il fait chaud ici, ouvre la fenêtre !

ここでなぜ les fenêtres でなく la fenêtre が用いられているのか。我々の意見では、種を指示するためには数が度外視されるからである。複数形は

個別物の集合を表す。個別物は概念の内包が適用される対象である。だから複数形は概念の外延を指示する。では、(15)においてfenêtreと呼ばれるものの内包(特性)が考慮されるのはなぜか。開かれるものという特性がouvrirという動詞の概念と結合するからである。このことは談話の論理から正当化されよう。〈部屋の中が暑い。だから外の空気を取り入れなければならない〉というのが先行文での推論である。ouvre la fenêtreはその帰結に応じた表現である。fenêtreはouvrirという動作を受けてその機能を果たす。機能は開口部という特性である。それが指向されているのである。そしてここではouvrir la fenêtreという一つの動作が表現されていると考えられる。個々の窓は考慮外である。

単数名詞が特性を指示する事例についてEpstein(1999)ではそれが場面の認知的枠組みの中での突出した「役割」を表すとされている。役割とは「値」と対偶をなし、値は役割を具現する個別物である。例えば同じPresidentという語は(16-a)では役割を、(16-b)では役割を果す個人を指す。

(16) a. The President is elected every four years.
b. The President is giving a speech tonight.

こうして例えば

(17) The boy scribbled on the living room wall.

において落書きされたのは4面のいずれかの壁であるにもかかわらずthe wallが役割を表しているという。ここではroomの認知的枠組みのなかで役割から値である各面の壁が「のぞかれる」という。つまり間接的に値に到達するというのである。同じ事態に対して不定冠詞が用いられるなら壁の値が直接考慮されるが、その突出性は非常に低いという。

(18) The boy scribbled on a living room wall.

定冠詞+単数名詞がEpsteinの言うとおり役割を指示するとしても、役割が何を際立たせるのかが明らかでない。我々の意見では(17)では落書きがどこになされたかが情報伝達上の焦点である。それに対して壁というものが事物のエレメントとしてはっきり想起される必要がある。文例をフランス語に置き換えてみよう。

(19) a. Le garçon a gribouillé sur le mur du séjour.
b. Le garçon a gribouillé sur les murs du séjour.
c. ?Le garçon a gribouillé sur un mur du séjour.

定冠詞+単数名詞のle mur では壁という種が浮上する。le mur はla

porte, le lit などとの他者関係において表現価値が生じる[3]。このことがEpsteinの言う突出性であろう。les mursは個々の壁の集合に当たるが、落書きが二面にわたっていることを伝える上で意味がある。un murは落書がどこにあるのかを特定する話者の狙いに合致しない。どこかを指定するには共話者において既知の領域に定位されなければならないから、不定冠詞は適合しない。

そもそもEpsteinが役割と値という対概念を導入したのは単数名詞が一般性を指示するときに、複数存在する個物の認識をどう関連づけるかという問題にぶつかったためである。これについては第一に、表現における一般性と実在における対象の特殊性とは異なる認識のレベルに属すものであって、二つのレベルのものが表現において同時に解釈されることはないと言わなければならない。一般性は概念によって組織される領域に属す。だが一般的特性は個々の特殊なもののなかにも再認されるのである。したがって実在の認識の枠組みでは複数存在する実体に対して単数名詞が用いられるという事例は何ら矛盾することではない。我々は一般性から特殊な個別物の認識に移行するし、その逆の操作も行う。例えば単に「丸いもの」という規定が与えられるだけで、我々は眼前にある虫眼鏡や時計の文字盤に視線を向ける。逆に、それらの個物の特徴、他と区別される本質的なものを捉えて、それらを質的に同定する。表現に直接に対応している一般的認識（丸いもの）とそれを特殊な個物の表象（認識）に適用することとは別である。単数名詞le murを用いた（19-a）を承けて落書きが見られるのは壁の1面なのか複数の面なのかという判断は言語外の領域においてなされており、いわゆる語用論的レベルに属す。

この点に関して練習問題となるような例⑳が東郷（2001）に検討されている。

⑳　［大きな屋敷の玄関の間で、ドアは4つありすべて閉じている。話し手は外出用の服を着て手にはスーツケースを持っている］
Ouvrez la porte s'il vous plaît.

この文を聞いた者が外へ通じるドアを開けるので、「定名詞句の指示は成功する」と述べて、東郷はla porteを用いるこの文によって聞き手がドアを選ぶことができる理由を問うている。論者によればここでは「外出」ということが「認知的フレーム」となって働き、指示対象が存在する談話領域としての「値踏みの場」（circumstance of evaluation）が形成される。そ

の値踏みの場において該当するドアは1つしかないという。

さて論者の言う値踏みの場とは、我々の意見では発話の内容(教示)を実在の場面の認識に適用するプロセスに相当する。(20)の la porte は個々のドアではなく、ドアという種を指示している。ここではそれは〈他の空間への通行を可能にするもの〉という概念(内容)を想起させるであろう。したがって ouvrez la porte は先の ouvre la fenêtre と同じく一つの行為を(一般的に)指定しているにすぎない。しかし聞き手がどのドアを開けるべきか判断するには発話者の行き先が分かれば十分である。この判断は文に対応する思考とは別の領域でなされるのである。Le N は一般的に周知の種を指示するか、特殊な知識領域に属す既知の唯一物を指示するかのいずれかであり、その中間はない。

最後に種の表現が一般性としての個体表象をもちうることを指摘しておこう。それは行為者名詞の場合である。

(21) Sonnez. Le boucher vous conseillera.

これはスパーマーケットの肉売り場に掲示されていた文言で、Martin (1986) に引用されたものである。論者によれば肉売り場には5・6人の肉屋が働いていて、客の呼びかけに応じて一人また一人と別の者が出てくる。しかし(21)の le boucher は特定的に解釈されない。このことについて Martin は次のように説く。"(...) en dépit de l'extrême étroitesse de l'univers de discours, c'est un effet non spécifique qui est visé : dans chaque monde considéré, le boucher en tant que tel renseigne le client, traité comme un individidu, d'homme à homme (à l'exemple du *petit commerce*)" ここには助言をする肉屋の行為の反復が考えられている。だが、sonnez は条件節の機能をもつ。(21)は Si vous sonnez, le boucher vous conseillera に等しい。掲示文は肉屋が客の求めに応じて助言するという約束を表現している。この一般性のなかで boucher は職業の主体を意味している。それは役目を果たしうる者であって、ある時に役目を果たす個人ではない。この可能的行為者の表象は(22)に見やすい。

(22) Qui est-ce qui fait le pain (dans le monde) ? C'est le boulanger.

le boulanger は普遍的な主体に当たる。(21)の le boucher を発話場面にいる個々人に関係づけるとき、我々は le boucher vous conseillera が実現される場面での特定の肉屋を想像する。だがそれは文に表されているもの(概念)でなく、それから導かれたものである。

3．一般的周知性

我々が考察した文のタイプは表現される事行が特定の時に定位されるから、動作であればその主体や対象は唯一存在である。それらは話者において認識の対象となった場面の要素である。対応の談話領域において名詞句がそれら特定的な実体の一般性を指示するということは事行も一般的に種別化されるわけである。このことは同じ対象に個別的（特殊的）に照応する不定冠詞付き名詞句と対比すれば明らかである。例えば

(23) a．On va se bavarder au café après le déjeuner.
　　b．On va se bavarder dans un café après le déjeuner.

au café は第1節に挙げた施設名のグループに属す。se bavarder au café は一つの活動を一般的に指示する表現となりうる。他方 se bavarder dans un café は場所の個別性に関心が向けられていて、話者が限定を加えるかもしれないと思われる。Un N が café という種に属す可能な個別物の表象をもたらすからである[4]。

名詞が定冠詞と共に種を指示するなら、種は一般的周知性をもつものであるが、この周知性は語にある概念が対応することとは違う。語と概念の対応は語が記号として意味をもつことに他ならない。周知性は言語内のもう一つの約定であって、言語外の論理的基準からすれば世界の各分野の知識の共通領域において主だったものだと言える。例えば(24)の各項は輸送手段のカテゴリーに属し、動詞句 prendre Le N を形成しうる。

(24) le train, l'avion, l'autobus, la voiture, le taxi, la moto, l'ascenseur, l'escalier, etc.

(25) On était parti pour Marseille où on devait rencontrer Luc. On prenait la voiture.

ここには貨物の輸送に使われるものが含まれていない。prendre le camion という表現は存在しない。また、bicyclette も除外される。prendre la bicyclette ではなく prendre une bicyclette と言われる。対象が身近なものであると言うことだけでは Le N によって種を想起させることができない。備品、器具あるいは身の回りの物などは離散的なものとされることが普通である（une table, des chaises, une tasse, un stylo, etc.）。それは特性よりも場面における存在が念頭に登りやすいからであろう。しかし、そうしたものであっても特定的事行を表現するのでなく、そのものの固有

性と役割が考慮される文脈ではLe Nが現れる。

(26) L'Italie, donc, n'a pas de pièces, mais elle ne manque pas d'idées. Pour rendre la monnaie, les commerçants donnent un timbre ou deux caramels. Comme les Allemands qui, au lendemain de la guerre, utilisaient *la cigarette* à la place du phenning manquant. (*L'Express*, 6-12/12/1976)

ここではutiliserという動詞と共にcigaretteが他の種との対比で選択されたことが含意されている。

(27) Une peluche. C'est un jouet, un nounours fait avec de la mousse et des poils. On dort avec, on fait des calins et c'est tout doux quand on la caresse. Parfois on peut mettre *le pyjama* dedans. (Duhamel, *Le gros dico des tout petits*)

当該の文で子どもがぬいぐるみを眠らせること(遊び)が想起されている。pyjamaはそのための用具、即ち役割を担うものと考えられる。

4. おわりに

本稿で特に指摘したかったことは特定的文脈で実在の唯一物の認識が言語表現の一般性に代表され、また統括される関係である。名詞は語彙項目として抽象的な種の表現でありながら個体名詞であれば唯一物を指示しうる。その場合、発話前に指示物について具体的な情報が与えられていなければならない。そうでなければ我々は名詞が概念に対応するものと解釈するしかない。他方でまたその概念の内包を満たすような個物を我々は具体的に想起することができる。例えばJ'ai pris le train pour venir iciという文はある人がtrainというものを利用したことを伝える。trainという名詞はその内包即ち属性の束を想起させるが、それらの属性は実在の個々の表象、経験的知識の中に再認される。このことによって、つまり一般性によって対象が質的に同定されるわけである。この質的同定に対して「私」が乗った列車は今度はその実在に関する情報によって同じ種に属す他の個体と差異化することができる。この特殊化の操作は当該の場面についての知識領域においてなされるわけで、一般性のレベルを離れている。J'ai pris le train pour venir iciという文はあるところに来るためにどんな輸送手段(種類)を利用したかを伝えようとする表現であり、それにとどまるので

ある。

注

(1) 分析文とはカントの用語に由来する。述語が主語の概念に含まれている判断をカントはanalytischと呼んだ。cf. Lalande, A. Vocabulaire technique et critique de la philosophie.

(2) 一般的周知性。Damourette, J. et Pichon, E. (1911) に示唆されている。cf. "La pensée s'écoule toujours dans le temps, et dès lors les substances se présenteront forcément à nous soit comme déjà connues et classées par l'esprit (notoire), soit comme se classant actuellement (présentatoire), soit inconnues (transitoire)." (§ 364, Tome 1)

(3) le mur du séjour での mur は特定個物の部分であるから(15)での fenêtre と同じステータスではない。だが、mur のような名詞は部屋か敷地の境界という空間的枠組みの限定が前提になるものであれば、この例のような限定ではそのものの一般性が考慮されると言えよう。

(4) Un N による不特定の個別指示は他の個体との差異を含意しないこともある。その場合には Le N とのあいだの選択に制約がかからない。

a. Un gars entre chez le coiffeur et il dit : (...)

b. Un gars entre chez un coiffeur et il dit : (...)

c. Une dame du monde va au restaurant et elle appelle le garçon.

d. Une dame du monde entre dans un restaurant et elle appelle le garçon.

参考文献

東郷雄二 (2001) :「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』35, pp. 1-14.

東郷雄二 (2001-b) :「定名詞句の「現場指示的用法」について」『京都大学総合人間学部紀要』第7巻, pp. 1-7.

BORILLO, A. (2001) : "La détermination et la préposition *à* en français", Blanco, X et alii (eds) *Détermination et Formalisation*, J. Benjamin Publishing Company. pp. 85-99.

BIRNER, B. & WARD, G. (1994) : "Uniqueness, Familiarity and the Definite Article in English", *BSL* 20, pp. 93-102

DAMOURETTE, J. & PICHON, E. (1911-1940) : *Essai de grammaire de la langue française*, Ed. d'Artrey.

DUCROT, O. (1972) : *Dire et ne pas dire*, Hermann.

EPSTEIN, R. (1999) : "Roles and non-unique definites", *BSL* 25.

FURUKAWA, N. (1986) : *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho.

FURUKAWA, N. (1997) : "Les Glaneuses de Millet : emploi intensionnel de Le(s)", *Revue de Sémantique et Pragmatique* 2, pp. 122-133.

HAWKINS, J. A. (1978) : *Definiteness and Indefiniteness*, Croom Helm.

KLEIBER, G. (1986) : "LE générique : un massif ?" *Langages* 94, pp. 73-113.

MARTIN, R. (1986) : "Les usages génériques de l'article et la pluralité", J. David et G. Kleiber (eds) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Kliencksieck. pp. 187-202

MONNERIE, A. (1985) : *Le point sur... l'article en français*, CIEP, 1, av. L. Journault, Sèvres.